

From Hyperesthesia to Numbness. Analysis of *En rade* of Huysmans (On Neurosis Literature (3))

Kensuke KUMAGAI

Abstract

This study examines the representation of the “neurotic” in *En rade* (*Stranded*) (1887) — a novel written by Joris-Karl Huysmans during his passage from naturalism to mysticism. In this work, which most contemporary critics received slightly less favorably compared to his epoch-making *À rebours* (*Against Nature*) (1884), the couple Jacques and Louise Marles suffer from the rural realistic events in Lourps. Jacques is haunted by the hallucinatory waking dreams; Louise is afflicted by a nervous illness with hysteria and adynamia.

For a long time, in Huysmans’s career, *En rade* was regarded as a novel halfway between the naturalist and decadent or mystical phases, marked by the insert of dreams and hallucinations. This article notes, first, the relation of this text with *À rebours*, because both the novels include pathological behaviors, such as the hero’s addiction. Based on Huysmans’s experience of neurosis (and that of his mistress Anna Meunier) and the documentation of psychological studies in his epoch, especially Alfred Maury’s *Le Sommeil et les rêves* (*Sleep and Dreams*) (1861), the novelist of *À rebours* especially focuses on “Hyperesthesia” of Des Esseintes—symptoms induced by excessive external stimuli (“surexcitation”, “exacerbation”, “exaltation”) (Chap. 1).

Second, we examine Huysmans’s method of use of dream in *En rade* around the “dream of Esther”, to clarify how dream is related to reality. It is through the optical stimuli (in contemplation of simple motifs on the wall) that Jacques passes from the rude reality of Lourps’s castle to the dream world of a mystic and erotic atmosphere, from immobility to liquidity. Wondering to himself about the reason for this mysterious dream both on the materialist and supernatural interpretations, Jacques finally realizes that « l’insondable énigme du Rêve le hantait (the unfath-

omable enigma of the Dream haunted him) » (chap. 2).

Third, we view Huysmans's rendering of the lunatic world as the dreaming side, and that of rustic landscape as the reality side. Whereas the selenography is characterized by the absence of senses (smell, sound, color), we remark in this immobile and "non-human" universe, an analogy of Louise suffering from catalepsy, and paradoxically, a kind of ataraxia that Jacques acquired with the evidence of his wife beside him. Feeling troubled with a series of cauchemars, Jacques, finally, falls asleep ("assoupissement (drowsiness)", "engourdissement (numbness)"); through this state of mind, the scenery of Lourps is depicted as a simple landscape without senses, contemplated via Jacque's eyes excluding all thought ("neither sincere melancholy nor veritable joy") (chap. 3).

Huysmans reveals in *En rade*, a real and hallucinated world ("surreal" world), induced by external stimuli via the neurological system, surpassing the border between reality and dream, naturalism and idealism.

感覚過敏から精神の麻痺へ ——ユイスマンス『仮泊にて』分析（神経文学論（3））

熊谷謙介

ユイスマンス氏が作品の登場人物たちを神経質に、すなわち外から来る印象のなすがままに、直接に感受する性質を付加していくにつれて、彼らがもつ意志の力は弱まるのであり、自ら受け取った感覚から、強くまた執拗に行動をしていこうとする原動力を引き出すことができない存在として、描くことを強いられるのである。

（エミール・エヌカン『フランス作家群像』（1890）¹⁾）

夜はむしろ明るいように思えました。ほぼまんまるの月が上空に広がる霧を通してぼんやりと見えました。時によって見られるような、見えたかと思うと隠れ、また現われては雲の上にきらきらと光するという具合ではなかったのです。それは荒れ模様の夜ではありませんでした。そうかといって平穏な夜でもない——それは、無言の、無聊の、湿った夜でした。意志を欠いた、とでも形容したらわかってもらえるでしょうか。空はそれ以外に何の取り柄もない状態で、裏返しても格別に驚くほどのことはあるまい、まあ、そんな感じでした。

（アンドレ・ジッド『ぬた（パリュード）』（1895）²⁾）

フランス 19-20 世紀転換期の作品を神経文学という観点から分析する試

1) Émile Hennequin, *Quelques écrivains français. Flaubert, Zola, Hugo, Goncourt, Huysmans, etc.*, Perrin, 1890, pp. 203-204. 以下、本稿では刊行地の記述を省略する。

2) 『アンドレ・ジッド集成Ⅱ』二宮正之訳、筑摩書房、2015 年、pp. 378-379.

みとして、筆者はこれまでジャン・ロラン『フォカス氏』(1901)、ラシルド『動物女』(1893)を論じてきた。世紀末・デカダンス文学の徒花とされてきた両作品を「神経」を軸とすることで見えてきたのは、外界から来る未知なる感覚や、「動物＝女性」という「人間＝男性」という秩序から逸脱するとされてきたものが、神経を入り口として侵入することによって、「魂」や「心」を基盤として構築されてきた既存の物語秩序を大きく揺り動かしている状況であった。認識・統覚する主体から感覚・情動に襲われる受容体へ、内面の葛藤から「内面の終焉」(ローラン・ジェニー)へ、現代のポストヒューマン的状况にも通じることがこの時代に起こっていたことが幾分なりとも示されていればと思う。

このような視点から見る場合、ジョリス＝カルル・ユイスマンスの『さかしまに』(1884)がその出発点となる作品として重要さを失っていないことは確かであろう。一般的には好事家による「倒錯的」趣味の披歴として見られてきたこの作品は、周囲に刺激を配置して感覚を変容させようと行動を繰り返す試みとして読み替えられるものであり、主人公デ・ゼッサントは現代的に言えば、「外付けられた」主体とみなすこともできるのである。『フォカス氏』はこれを出発点として、主体の動揺をさらに押し進めた作品であり、『さかしまに』と類似の構造をもちつつも、『さかしまに』が人工天国を主体的に作り上げようとする物語であるのに対して、『フォカス氏』ではたえず外部から不可抗力をもって来る刺激に苛まれる受身の存在が描き出されているのである。

しかし本稿では、ジャン・ロラン論のようにこの作品を比較対象としつつも、ユイスマンスの『さかしまに』の次の作品、『仮泊にて』³⁾をとり

3) 本稿ではこの小説の題名として多く見られる『仮泊』ではなく、『仮泊にて *En rade*』と訳すこととする。『家庭にて *En ménage*』や『さかしまに *À rebours*』に見られるように、この時代のユイスマンスはタイトルに副詞句を多用することによって、通常作品名に用いられる名詞句による安定した印象を避け、揺れ動くイメージを与えようとしたという解釈によるものである。

あげる。破産のためにパリを離れざるを得なくなったジャック・マルルは、妻ルイズの故郷であるジュティニー村を見下ろすルールの城館に移り住む。廃墟のような建物に神経症に苛まれる妻とともに暮らすなかで、ジャックは不思議な夢を次々と見る。二人の金を巻き上げようとするアントワーンとノリヌなど田舎風俗に幻滅するも、ジャックは辺りのさもない自然の散策を続け、妻は猫に愛情を傾けるべき対象を見出す……という筋書きには一見、『さかしまに』のような際立った特徴を見出すことはできないように思われる。良く言えば自然主義への回帰として、一般的には夢の挿入によってレアリスム的な物語が混乱し空回りしているとして、同時代においても決して評判がよい作品ではなかった。

他方、『フォカス氏』をポスト・デカダンス小説と見なすことができるように、この『仮泊にて』も同様の枠組みを用いて分析することができるのではないだろうか。『さかしまに』は内面のない主人公による外的刺激への依存とその挫折の物語と解釈できる。デ・ゼッサントは神経衰弱に対し理想の環境の構築を試みるが、この反自然的な試みは頓挫し、人間の思惑を超えて繁茂する植物⁴⁾、そして城館の部屋に我が物顔に棲みつく動物たちが、『仮泊にて』では前景化する存在となる。いわばコスモスからカオスへの世界観の変容が跡付けられる作品であり、そこには登場人物となる夫婦二人の神経の変調が大きく関わっている。夫ジャックがうなされる悪夢と、妻ルイズが苦しむ神経症、そして特異な形で知覚される自然という三つの要素が、神経文学として論じるべき理由となる。

先行研究としては、フランスや英米圏においては、『さかしまに』の分析と比べて数は劣るものの、『仮泊にて』についても作品論が多くあり、この作品の舞台となるルールとユイスマンスの関係を証言から追った歴史

4) 「彼は植物や木々のこのカオスを見て呆然としていた」 Joris-Karl Huysmans, *Romans I*, Robert Laffont, 2005, p. 803. 以下、『仮泊にて』からの引用はこの版から行う。

研究から、レアリスムの物語に夢の挿話を挿入することの意味について論じたもので、多様な視点での分析がなされている。とくに後者については本稿では参照しつつも、初期の「自然主義」的作品群そして『さかしまに』を離れ、心霊主義そしてカトリシズムへの傾斜を示す90年代の作品群へと向かう途上において、マイナーな作品とされる『仮泊にて』の意義を位置づけなおすという、ある種の文学史的傾向が見られなくもない。本稿では最初にこの作品と『さかしまに』の関係を神経と感覚の観点から考察するが、それはこの作品の独自性を示す足掛かりのものとしてであり、ユイスマンスの作品史を目的としたものではなく、神経文学の一つのメルクマール的な作品として『仮泊にて』を考えたいと思う。

他方、日本においてこの作品を論じたものは稀であり、澁澤龍彦が翻訳して世紀末文学のバイブルという位置を得た『さかしまに』、またオカルティズムやキリスト教へ傾斜していく『彼方』『大伽藍』等の作品とは対照的に、いまだに邦訳がなされていないのが現状である。アンドレ・ブルトンがカトリック転向以前のユイスマンスを愛好し、『黒いユーモア選集』にこの『仮泊にて』の夢の挿話の一部を引用したことで、この作品名が記憶されることはあっても、地方の自然の微細な描写が大きな部分を占めるこの作品の全貌を示す機会は、翻訳の存在する欧米の諸地域と比べて、ほとんどなかったと言わざるを得ない。例外的に、岩渕邦子による伝記的事実をふまえた研究が挙げられる他⁵⁾、大野英士による『ユイスマンスとオカルティズム』では、「『仮泊』から『彼方』へ」と題された節で詳細に論じられている⁶⁾。

また、湯沢英彦による『魂のたそがれ——世紀末フランス文学詩論』で

5) 岩渕邦子「ユイスマンス研究——『仮泊』について」『愛知教育大学研究報告 人文科学編』第41号、1992年、pp. 113-125；「ユイスマンス研究——《さかしま》論 (I)」『愛知教育大学研究報告 人文科学編』第39号、1990年、pp. 23-34。

6) 大野英士『ユイスマンスとオカルティズム』新評論、2010年、pp. 158-172。

は『仮泊にて』に一章が割かれ、詳細に紹介、分析がなされている。「[「霊」と「肉」、「精神」と「身体」]の関係がきわめて脆弱なのが「世紀末」であり、身体的なものが精神的なもののコントロールを失って迷走する」時代という問題設定のもとに、「狂想のマチエール」と題された章では『仮泊にて』を、「コントロールをすっかり失った身体が、あるいはフォルムを欠いたマチエールの過剰な現われが、主人公をしばしば茫然自失の状態に追い込んでいる」⁷⁾ 作品として論じており、神経や心の表象を考える本稿では特に夢の挿話の分析で参考にした。まさに「魂」が「たそがれ」を迎えようとする時代の証言として、本稿ではとりわけ「麻痺」や「無感覚」という視点を付け加えることで、『仮泊にて』を考察していきたい。

本稿で神経表象を考える上でまず注目すべきなのは、作品中、重篤な神経症と思しき病に伏せる妻ルイーズの存在である。そしてそれはユイスマンスの内縁の妻、アンナ・ムニエ Anna Meunier の病歴と無縁ではない。ロバート・バルディックによる『ユイスマンス伝』によれば、「数年前[1880年代初頭]から彼女は、ある医者には神経症、別の医者には子宮筋層炎、さらに別の医者には萎黄病だという奇病に悩んでいた。彼女は最初、激しい頭痛と神経衰弱を訴えたが、のちには両脚に電撃痛を感じるようになっていた。真面目な医者であれ、藪医者であれ、誰もが治療不能と認めた」⁸⁾とされている。バルディックが作品中の描写から逆算して記述している可能性も否定できないものの、『仮泊にて』のルイーズの病状の発想源は、ユイスマンス自身の伝記的要素が挙げられると言えるだろう。

さらに、前作の『さかしまに』の冒頭、主人公デ・ゼッサントをめぐる家系を紹介する「略述」でもこれに近い病状が短い形で、さらには『仮泊

7) 湯沢英彦『魂のたそがれ——世紀末フランス文学詩論』水声社、2013年、pp.8, 101-102.

8) ロバート・バルディック『ユイスマンス伝』(1958)岡谷公二訳、学研、1996年、p.167.

にて』の舞台となるルウルの城館についても言及されている。

母は色の白い、黙しがちな、すらりとした婦人であったが、衰憊 *épuisement* の果てに死んだ。[……] 彼女はルウルの城館の薄暗い部屋で、いつもじっと動かず *immobile* 寝ていたのである。⁹⁾

『さかしまに』においてもすでに『仮泊にて』で結実する設定がほのめかされていたという事実と同時に、ユイスマンス作品世界での女性の死に至る病の様子の特徴として、不動性と衰弱が挙げられていることを指摘したい。本論で見るように、ユイスマンスの狂気の表象の両面をなすものとして、痙攣に代表されるような活動的な面とともに、硬直に見られる不活発的な面をとりあげていくこととなるだろう。

他方、『仮泊にて』において神経症に関わっているのは妻ルーズだけではない。夫ジャックもまた神経症とまでは言えないとしても、田舎暮らしにより大きなストレスがかかり、奇妙な夢を立て続けに見る存在として描かれている。これもまた、ユイスマンス自身が置かれた状況を反映した面が大きいように思われる。『さかしまに』執筆にかかわる時期から、自身が「不治の神経の病」にかかって苦しんでいることを書簡で伝えている¹⁰⁾。こうした面は『さかしまに』のデ・ゼッサントの人物造形にも影響を与えており、本論で明示していくが、注目すべきは、『仮泊にて』の取材源となったルウルの城館の最寄りの小村ジュティニー滞在(1884)に

9) 『さかしま』(1884) 澁澤龍彦訳、河出文庫、2002年、pp.10-11.

10) 「ひどい冬を過ごしたものだ。不治の神経の病で、どんな仕事も手がつかず、何度もシャワーを浴びたり、鎮静薬が手放せなかったのだ」Lettre à Théodore Hannon du 13 septembre 1882, *J.-K. Huysmans, Lettres à Théodore Hannon*, éd. P. Cogy et Ch. Berg, Christian Pirot, 1985, p. 269. 「ここ最近では神経痛 *névralgies* でひどい二カ月を過ごしていた。春めいたかと思えば冬に舞い戻ったりする気候が私を苛み、宿病の神経症 *névrose* が動き回って、私は集中砲火を受けたように、精神 *esprit* も身体 *corps* も痛めつけられている」Lettre à Théodore Hannon de mars-avril 1883, *op. cit.*, p. 271.

においても、ユイスマンスはゾラ宛の手紙で、神経症に言及していることである。

実を言えば、パリを離れるのはいささか淋しく、というのも田舎の感覚を持ち合わせていないからです。しかしこうした田舎暮らしも良いもので、パリでは神経に湿布を当てているのですから。野外という薬を飲んで、ときに退屈であり、飲みこむのに難儀することもあります。効き目はありそうです。¹¹⁾

ユイスマンスは多量の刺激によって神経を苛む都会を逃れて、『さかしまに』の場合にはフォントネーという郊外に隠遁先を見出し、結局のところ挫折していったデ・ゼッサントを登場させていた。『仮泊にて』では文字通り、嵐に見舞われた船が緊急避難する波止場を田舎生活に求めたわけである。しかしこの薬は、本人が言うように「ときに退屈であり、飲みこむのに難儀することもある」わけで、この苦闘の姿が『仮泊にて』に反映されていると言えよう。

しかし、この夫妻における「神経症的なもの」をそれぞれ見るだけでは、『仮泊にて』の主要部分をなす二つの要素をとり逃すことになってしまうだろう。一つには夢の物語であり、この作品の特異性であるとともに、同時代の読者を大きく戸惑わせたものである。本論では夢の内容にとどまらず、作品中の夢の配置（どのように「現実」から「夢」へ、「夢」から「現実」へと移行させるか）、夢解釈の言説（どのようにジャックは自らが見た夢をとらえ、さらには夢を見たこと自体を解釈するのか）、そして夢と「神経症的なもの」の関連について考察する。フロイト『夢解釈』の先

11) 1884年7月22日付ゾラ宛書簡、*Lettres inédites à Émile Zola*, Droz, 1953, p. 108. 次の書籍にも引用されている。Henry Lefai, *Huysmans à Lourps*, Chez Durtal, 1953. 以下のユイスマンス研究サイトで全文を読むことができる。<https://www.huysmans.org/bibliophiletexs/lefaill.htm>.

駆的な例とも紹介されることが多い『仮泊にて』について、客観的言説ではなく、あくまで登場人物の台詞と背景描写による「物語」を通じて人間が夢を見る行為が問われているという観点から、神経や病理とのつながりを中心に見ていきたいと思う（第2章）。そしてその前提として、『仮泊にて』に先立つ『さかしまに』の神経症・夢表象を確認することで、両作品において変容しているものをあぶり出したい（第1章）。

そして神経表象は「神経症」表象で占められるものではない。この作品の大きな部分を占める風景描写にもまた、外界を刺激として感受し表象するという側面がある。そしてここで言う「風景」は現実と夢の領界の区別をつけなくてよいものである。月旅行の夢に出てくる、空虚でかつ感覚を欠いた乾ききった世界は、二人が仮住まいする荒れ果てたルウルの城館やその近隣の自然、情感を呼び起こしがたい、ピクチャレスクという概念から遠く離れた世界と、どのような類似性を持つのか。こうした環境との相互作用によって、どのようにジャックは外界を知覚し、主体を変容させるのか。そしてこれは「神経症的なもの」といかなる関わりを示すのか、最後に考察することになる（第3章）。

1. 『さかしまに』から『仮泊にて』へ

『さかしまに』出版後、ユイスマンスは次なる作品の構想を得る目的もあり、先述したように1884年夏に休暇をプロヴァンから6キロ、現在のセーヌ＝エ＝マルヌ県にある小村ジュティニーで過ごし、翌夏はアンナ・ムニエと彼女の娘・妹とともに、村を見下ろす丘にそびえるルウルの城館で過ごした。マラルメに宛てた手紙では、「田舎暮らしは慣れておらず、広い地平線よりはいつも芸術と人工の方を好んできた」¹²⁾とあり、『さかしまに』の人工天国と、来るべき作品である『仮泊にて』の田舎との対比

が注目される。『さかしまに』の結末部では、「彼〔デ・ゼッサント〕にはいかなる停泊地 *rade* も残されていないければ、いかなる波止場 *berge* も残されていないのだった」¹³⁾という言葉も見られ、『仮泊にて *En rade*』に物語が引き継がれることも確認できるだろう。

『さかしまに』はこれまでさまざまな観点から分析され、また研究外の領域でも愛読されてきた作品と言って良いが、その大きな理由として、ピエール・ブリュネルが「カタログ」と称したように¹⁴⁾、まずはデ・ゼッサントの学術的な嗜好品のリストといった面が与えた衝撃は大きかったと言える。それに加えて、全16章からなるこの作品では、デ・ゼッサントの関心は章ごとに室内装飾や絵画といった多様な領域に移り変わっていき、前章で耽溺していたものがたちどころに放棄されるというように、物語の非連続性や一貫性のない主体といったものも浮かび上がってくる。本論稿末に示すのは、『さかしまに』の各章において、1. 刺激を与えるもの、2. 具体的な挿話、3. 関連する引用をまとめた表である。

*

ここで注目したいのは、デ・ゼッサントにとっては心身の鎮静を目指すものであったとしても、刺激が次々に過剰摂取されていく状況であり、こうした行為による病的な感覚過敏あるいは感覚の過剰摂取という症状である。各章でデ・ゼッサントが選び抜き蒐集した珍奇な植物や香りは、ときに共感覚を通じて彼の神経に大きく作用し、感覚を沸騰させていくが、失神や幻覚を生み出し、彼を憔悴に至らしめる。こうした状態を『さかしまに』では、「昂奮 *surexcitation*」「亢進 *exacerbation*」「高ぶり *exaltation*」

12) バルディック、前掲書、p. 143。

13) 『さかしま』前掲書、p. 301 : *Roman I, op. cit.*, p. 760.

14) Pierre Brunel, « *À rebours*: du catalogue au roman », dans A. Guyaux, Ch. Heck, R. Kopp (dir.), *Huysmans: une esthétique de la décadence*, Honoré Champion, « Travaux et recherches des universités rhénanes », 1987, pp. 13-21.

と名指しており、神経に関わる個所だけでも、例えばデ・ゼッサントの人物紹介にあたる「略述」にある、「血液や神経の真に過激な昂奮 surexcitation de sang et de nerfs」¹⁵⁾、「彼の健康がひどく衰え、神経系統が過敏になった son système nerveux s'exacerba」¹⁶⁾ や、「修道院の雰囲気に含まれ、香の匂いに酔わされて、彼は神経を昂らせていた il s'était exalté les nerfs」(第7章)¹⁷⁾、「神経症によって異常に昂奮した脳髓 un cerveau surexcité par la névrose が保有し得る、あらゆる錯乱の酵母菌がそこに沸き立っていた」(第9章)¹⁸⁾ という表現が見られるのである。

第5章ではデ・ゼッサントは居室に飾る絵画作品を求め、ギュスターヴ・モローの《サロメ》を皮切りに情景の描写を進めていくのであるが、「精神の快樂と眼の歓びのために」という動機は、「学匠的なヒステリーと、入り組んだ複雑な悪夢と、無頓着な残忍な幻影とによって、神経組織に激動を与えてくれるような lui ébranlant le système nerveux」作品を希求することであると展開している。神経を揺さぶるものを求めて——、これがデ・ゼッサントの行動原理であり、『さかしまに』の時期においてユイスマンスが考える、神経と外界の刺激との関係性であったと言えよう。のちにジャン・ロランは『フォカス氏』において、主人公フレヌーズが囚われるオブセッションとして、モローをはじめアンソールやヤン・トロープが描き出す悪夢のような形象にとりつかれ、神経をすり減らす様子を描き出すが、『さかしまに』がこうした主題の端緒であることは否定できない。一方で、『フォカス氏』論で指摘したように、フレヌーズはイメージが否応もなく飛び込んできて神経を苛まれるという、徹底して受動的な位置を強いられるのに対して、『さかしまに』では人工天国を作るという創造者

15) 『さかしま』前掲書、p. 15 : *Roman I, op. cit.*, p. 582.

16) 同書、p. 17 : p. 583.

17) 同書、p. 113 : p. 644.

18) 同書、p. 157 : p. 668.

的な位置が、たとえ結局は制御不可能な状態に陥るとしても、出発点には存在していたという点を指摘できるだろう¹⁹⁾。

ユイスマンスは『さかしまに』を執筆するにあたり、ゾラに対し、彼が重視する調査取材をふまえたことを確言しており、神経症に関しては、「私は神経症についてのブーシュとアクサンフェルドの著作に従って一歩一歩あゆみを進めました。症状の諸経過に介入して、病気にもなって起こる発作を、ある段階から別の段階に変えるようなことはしなかったのです」²⁰⁾と述べている。リヨンの病院の医師であったウージェーヌ・ブーシュは『急性・慢性の神経状態、神経症について』（1860）で著名であり、パリ大学医学部教授のオーギュスト・アクサンフェルドの『神経症論』は、彼の死後の1883年に改版された際に700頁の補論がつけられた大部の作品として知られている²¹⁾。この二作が『さかしまに』においてどのような影響を与えたかについて、後者については大部であるため通読するのは難しかったと推定されるが、頭痛や眩暈、食欲不振に加えて「心身の感覚の亢進 *sensibilité morale et physique exacerbée*」や音や匂いに対する「感覚過敏 *hypersensibilité*」の実例が見られ、前者については具体的な症例を示すケーススタディが主であるため参照しやすかったのではないかと、ピエール・ジュルドは推測している²²⁾。加えて、両論とも神経症が遺伝する側面を示しているという点が、『さかしまに』の冒頭の記述につながっているのではないかと、そして症状の多様性は『仮泊にて』において、医

19) 拙論、「神経文学論（1）—ジャン・ロラン『フォカス氏』分析」『人文研究』第208号、2023年、p. 38.

20) *Lettres inédites à Émile Zola, op. cit.*, p. 103.

21) Eugène Bouchut, *De l'état nerveux aigu et chronique ou nervosisme*, Baillière et fils, 1860 ; Auguste Axenfeld, *Traité des névroses*, 1863, deuxième édition augmentée, Germer Baillière, 1883.

22) Pierre Jourde, « La clinique d' "À rebours" de quoi au juste des Esseintes souffre-t-il? », *Studi Francesi* [En ligne], 197 (LXVI | II) | 2022, mis en ligne le 01 août 2023, consulté le 20 octobre 2023. URL: <http://journals.openedition.org/studifrancesi/49473>; DOI: <https://doi.org/10.4000/studifrancesi.49473>

者が匙を投げるようなルイズの病状の複雑な様子をも示すものなのではないかという仮説を立てているが、後者についてはあとで論じることとする。

他方、このようにユイスマンス自身によって明示されていない参照源として、ここではアルフレッド・モーリーの『睡眠と夢』(1861)を提示したい²³⁾。現代において夢と精神障害は直接関連づけられるものではないが、この著作では、夢は神経や脳の活動に関係して生じるものであり、心的活動が弱まった状態として、精神異常 *aliénation*、幻覚 *hallucination* などと地平を共にするものとして扱われた。また『さかしまに』でも、後に見る『仮泊にて』のような複雑な展開はしないものの、デ・ゼッサントは〈梅毒 *Grande Vérole*〉のイメージと化した女の悪夢を見ていたのであった²⁴⁾。同時代に版を重ね影響力の大きかった『睡眠と夢』について、ここでは先述の「昂奮 *surexcitation*」などの概念群に注目すると、多くの使用例が見つかり、例えば下記のような記述を見つけることができる。

夢というものは、完全な麻痺 *engourdissement* と対置されるような昂奮 *surexcitation* のあとも、脳のいくつかの部位と感覚器官が目覚めたままであることに起因するものである。

23) Alfred Maury, *Le Sommeil et les rêves* (1861), Didier et Cie, 1865. ロール・ド・ラ・トゥールの博士論文「J.-K. ユイスマンスと医学」では、モーリーの著作をユイスマンスが読んだ可能性は否定できないが、実際に参照したのはイギリスの心理学者ジェームズ・サリーの『心理学研究』(1881)の仏訳『感覚と精神の幻想』(1883)とされている。Note rédigée par Per Buvik dans Huysmans, *Romans et nouvelles*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 2019, p. 642. また、フロイトの『夢判断』において展開する、語による連想が夢に与える影響などもモーリーは指摘しているが、ユイスマンスの夢の表象にも同様のものがあるのではないかと解釈もある。 *Romans I, op. cit.*, p. 795.

24) 「彼はやや疲れをおぼえ、室内の植物の吐き出す空気に息苦しくなった。[……] 寝台に横になりに行った。けれども、ぜんまい仕掛のように唯一の主題に取り憑かれた精神は、眠っていてさえ、その鎖を手繰ることをやめず、やがて彼は、暗鬱な狂気のごとき悪夢のなかに転げ落ちたのである。」『さかしま』前掲書、p. 134 ; *Roman I, op. cit.*, p. 658.

疲労によってもたらされた麻痺状態 engourdissement に、休養の欲求があるにもかかわらず解消されない、一定程度の昂奮状態 surexcitation が結びつくとき、また夢が感覚の部分的な高まり exaltation を伴ってかきたてられるとき、睡眠者の状態は狂人 aliéné に近接する。²⁵⁾

夢と神経症の連続性が確認できるとともに、麻痺と昂奮の弁証法によって夢が生成するといった図式が見出され、両者とも『仮泊にて』において全面的に展開される枠組みとなるだろう。『さかしまに』では、夢よりは神経症が、麻痺よりは昂奮が描かれる傾向にあった。『仮泊にて』では、これらのバランスはどのように変化するのだろうか。

2. 夢という〈謎〉——「エステル」の夢」をめぐる

『仮泊にて』は冒頭、『さかしまに』の結末で示唆された「停泊地」「波止場」を求めるかのように、パリで事業に行き詰ったジャックとルイーズ夫妻が、妻の血縁を頼ってジュティニー村、そしてルウルの城館へと果てしない道を歩いていく場面から始まる（「避難所、二人が錨を下して、今後のことを話し合えるような停泊地」²⁶⁾）。しかしジャックが不安を覚えるのは生計だけでなくルイーズの病気のことであり、本章で中心となるジャックにおける夢の主題を分析する前に、その語りを確認したい。

ルイーズの病状は、診断する医師たちを戸惑わせる経過を示しており、突然に衰弱し苦痛の声をあげたかと思えば太り始め、肉付きの良い姿

25) Maury, *op. cit.*, p. 56 ; pp. 162-163.

26) *Romans I, op. cit.*, p. 782.

はしかし、二週間も経たずに痩せ細った様子にとってかわられるのであった。脚に火花放電のようなものが走る奇妙な痛みに襲われ、かかとを突き刺し、膝に穴を開け、ぞくっとする身震いと叫びをあげさせる。このような一連の症状の果てには、幻覚や失神、そして心身衰弱へと至ることとなる。²⁷⁾

一進一退、いやむしろ原因を特定できないまま急変するルイズの症状は、先述したユイスマンスの内縁の妻、アンナ・ムニエの実際の病状を想起させるとともに、ジャックそしてユイスマンスもまた感じているだろう、医学に対するある種の限界を示唆しているように思われる。ここで引用した記述に続く内的独白を、「ゆえに、病気はとりわけ霊的なもの *spirituelle* のように見えた」と締めているように、ユイスマンスはルイズの内にある、幻覚をも呼び起こす「神経症的なもの」のうちに湛えられた、科学では解明されない「謎」を喚起するのであり、これは後で見る「夢」に対する考えとも連動する立場となるだろう。

『仮泊にて』では3つの夢の場面が挿入されており、①エステル（第2章）、②月世界旅行の夢（第5章）、③真理の寓意としての娼婦の夢（第10章）となる。その中でここではエステルの夢を見てみよう。この夢の記述については、『仮泊にて』が『独立評論』誌上で連載される前に、1886年6月に『ヴォーグ』誌に「エステル、断章」として独立して発表されていた²⁸⁾。『ヴォーグ』誌は同時期、マラルメやヴェルレーヌをはじめとする「前衛」詩人たちの作品のほか、ランボーの『イリュミナシオン』やラフォルグの作品など古典的な形式を逸脱するような作品を発表しており、この「エステル、断章」も一種の散文詩として受容されていたよ

27) *Ibid.*

28) « Esther, Fragment », *La Vogue*, no. 8, le 13 juin 1886, pp. 255-260.

うに思われる。小説内に収められる際も、大きな変更は見られないため、このような「詩」を散文のなかにどのように織り込むのか、夢と現実をどのように結びつけるかが鍵となるだろう。

第2章の冒頭、夢ははまだ始まっておらず、おじ夫妻からの歓待——ひどい料理とワイン——を受け、部屋に戻った二人が疲れきっている様子を映し出している。

ルイーズは部屋に入ると椅子に崩れ落ちた。今日一日の昂奮 surexcitation はやっと終わった。すっかりへとへとで、脳は乾ききって何も考えることができず、骨の髄までくたびれてしまった。

[…]

ジャックはルイーズをじっと見つめた。何と！ これほど血の気を失ってしようとは！ 彼は身震いした。というのも見分けられる表情は神経症が断続的に進行している様子を示しているからであり、この隔離されたかのような廃墟のなかで、御しがたい苦痛が、今後発作を次々と引き起こすのではないかという不安に陥ったからである。²⁹⁾

「この隔離されたかのような廃墟のなかで」と訳した箇所は、直訳すれば、「この廃墟の隔離のなかで dans l'isolement de cette ruine」となり、倒置によって「隔離 isolement」という印象を強調する、ゴンクール、そしてユイスマンスを代表とするような印象主義的・芸術家的文体の一例、あるいは象徴主義的な表現とも言って良い表現であろう。一方でこの場面において「廃墟」は第一義的にはルウルの陰鬱な城館（第1章で執拗に表現されたもの）を指すが、血色とともに人間的な魂を失いつつあるルイーズの状態もほのめかしていると言える。このルウルという環境は、今後ルイー

29) *Romans I, op. cit., p. 792.*

ズの心身に深刻な影響を及ぼすだけでなく、そのアレゴリーともなっているのである。

ごつごつした寢床ですでにルイズは臥せっており、ジャックも寝ようとしてろうそくを消そうとするが、その前に壁を見つめる。

彼は機械的で意味のない仕事によって自らの苦しみを弱めよう *engourdir* と専心した。パネルにある菱形模様を数えたり、そこに貼られた壁紙で、文様がきちんとつながっていない部分を注意深く確認したりした。突然、奇妙なことが起こった。壁紙のおどろ棚の緑色をした棒の部分が波打ち *ondulèrent*、上塗りされてごわついた感じを与える壁が、水が流れる *un cours d'eau* ように皺を寄せ始めたのである。

そして、これまで動くことのなかった *immobile* 仕切りは、静寂の空間にかすかな音を響かせた。壁は液状化し *devenu liquide*、開かれるのではなく震えるのであった。ほどなく、壁は高くなって天上を突き破り、途方もない大きさとなった。流れ始めた石材はばらばらとなって巨大な穴が開き、見事なアーチが渡され、その下には道ができはじめていた。

だんだんと、この道の奥に、宮殿が現れ、目の前に近づいてきた。³⁰⁾

今日一日の昂奮、そしてルイズの健康に対する不安を抑えようとして、壁の文様を見つめるという作業をジャックは行いが、むしろこの単調なリズムで繰り返される模様という視覚的な刺激によって、石に囲まれた潤いのない城館という空間、ルウルの荒涼な風景を支配する不動という秩序が

30) *Ibid.*

溶解しはじめたと解釈できる部分であろう。固体から液体へという非現実的な表現が、あくまで実際の部屋にある、さもない設えを出発点として始まっていることにも注目できる（「文様がきちんとつながっていない部分」「上塗りされてごわついた感じを与える壁」の「皺」）。最後の行にあるように、現実のものとは思われない宮殿が出現し、王に凌辱されんとする女という夢が展開していくのであるが、その夢の材料としては、この日一日の間でも感情を逆なでし続けたルウルの城館のイメージが、陰画としてではあれ潜在していたことを示すものである。夢のなかの列柱が立ち並ぶ壮大な宮廷は、荒廃しているとはいえいくつもの大きな部屋が存在する城館から生まれ、ルビーやアメジストの宝石を实らせるぶどうの木々は、眠りに落ちる前に見た「壁紙のぶどう棚の緑色をした棒の部分」から触発されたものとも言えるのではないだろうか³¹⁾。

「エステル」の夢」と仮に呼ぶこの箇所では、実際にはエステル（旧約聖書の登場人物で、その美しさのためペルシャ王アハシュエロスに召されて、ユダヤ人という出自を隠し妃となった）については言及されておらず、王宮における少女と王という取り合わせを考えてみれば、『さかしまに』でも多くの言葉が割かれたモローの《サロメ》のイメージも発想源の一つとして考えられるだろう。但し、『さかしまに』の場合はエクフラシスとして視覚イメージを言葉で置き換えるように、描く主体が対象と距離を保ちつつ行う、安定した描写であるのに対して、『仮泊にて』では夢固有の論理というべきか、霧が晴れて女の裸の姿が現れそうところで、突然に描写が断ち切られるというような、不安定さが忍び込んでいる。テキスト上では破線が引かれ、「大きな叫び声が沈黙を破った」と続き、ジャックはルイーズの唸り声によって夢から覚めるのである。

31) 以下にも同様の分析がある。Hannah Scott, "Vert Versus Verre: Vegetal Violence in J.-K. Huysmans's *En Rade*", *French Studies*, vol. 69, no. 3, 2015, pp. 17-18.

ジャックは夢の痕跡を辿るように館の部屋のドアを次々に開けていく。夢のなかの豪華な空間とは対照的な、朽ちつつある脱幻想的な空間の描写が繰り返される中で、彼はぎしぎしいう足音が聞こえたような気がして不安を覚える。「予想できない怖れ、苛烈で、確実に起こることを知っている危険に対するものではない怖れ」「未知のものへの怖れであり、黒い荒地で不安げに響く物音によって亢進させられた神経上の恐怖」³²⁾ という表現については、感覚、とりわけ聴覚的要素が神経を経由して、怖れという想念を生み出す過程に注目したい。『さかしまに』においてもこのような怖れは主題化されていたが、それはあくまで外界に由来する、人工天国を超えた先にある潜在的な恐怖であり、デ・ゼッサントはそれもまた何度も調伏しようとするのに対して、ここでのジャックは夢においても現実においても、未知なる感覚の襲来の不安に翻弄されるがままになっていると言える。

そして彼はそのとき説明のつかない、思考の混沌 *un inexplicable to-hu-bohu de réflexions* を感じた。数珠つなぎになった想念が一粒一粒、念を込められたように頭の中でとりとめなくつぶやいては、雨あられのように降り注ぎ、いっさいの糸筋もつながりもないままに続いていた。³³⁾

滞在最初の日から、昼はその環境から強烈な印象を受け、夜は不思議な夢に遭遇したジャックであるが、章をまたいだ翌日には、昨夜見た夢は何だったのか、そもそもこのような夢を見るというのは何を意味するのかを自問し始める。この城館の「暗さと寒さ」に影響されるかのように、「病的

32) *Romans I, op. cit.*, p. 799.

33) *Ibid.*, p. 800.

で鈍い憂鬱 *la mélancolie malade et sourde*」にとらわれたまま、階段でモリフクロウを殺したことを想起して身を震わせた後で、「彼は自己分析しようとしたが、自分の魂は向かうべき方向を失った状態で、外から受けた印象の数々 *des impressions externes* に立ち向かおうとしても従うばかりであり、理性に反抗して皮をはがされた神経 *des nerfs écorchés en révolte* に苦しめられるばかりなのだ。」³⁴⁾ 自己を統括するような視点で理智的に分析することの不可能性が打ち明けられるのと同時に、外界からのさまざまな刺激に曝されるむきだしの「神経」という像も喚起されている。

この第3章に至って、ジャックは昔読んで記憶のある聖書のエステル物語を思い起こす。しかし、夢の要素についてはこれで説明づけられるが、なぜ長く心の中から消えていたこの記憶がよみがえったのか、そのような状況は何もないはずなのに、とジャックは自問する。エステルをめぐる挿話の記述に関する印象的な本も読んだことがなければ、それを主題とした版画も絵画も見ることがないのに……。聖書を読んだ記憶が長年、自分の記憶の一辺境に存在していて、揺籃期を経て不思議な花を咲かせるかのように、夢想の国で開花したと考えざるを得ない、ということが自由間接話法で語られるが、結局は「〈夢〉に解けない謎がとりついている *l'insondable énigme du Rêve le hantait*」³⁵⁾ という言葉でそれは表されることになる。

古代に夢判断の書を残したアルテミドロスからは「夢は魂が作り上げるフィクション」という言葉を引き出し、新プラトン主義の哲学者ポルピュリオスについては、現実が仕掛ける罠に注意喚起するのが夢であるという考えを示しつつ、近代科学における夢に関する理論についても言及を忘れない。「現実生活の印象が単に変容したものであったり、以前に獲得して

34) *Ibid.*, p. 805.

35) *Ibid.*, p. 807.

いた知覚が変形を被ったものにすぎないのか？」³⁶⁾ 多様な夢解釈、いやむしろ夢についての言説を次々に示しては自問自答していく叙述の形式は、『さかしまに』を彷彿させるところがある。しかしながら、登場人物が見る夢についての作品内での扱いについて言えば、『さかしまに』唯一の夢である〈梅毒＝女〉の夢においては、夢と現実の関係性は明示されており（飛び上がって眼を覚ます直前、眠っているデ・ゼッサントは「この醜い植物の傷口と肉体を接触させていた」）、「やれやれ、ありがたい、夢だったのか！」³⁷⁾ という言葉で当該の章が終わるように、夢を以後の現実生活に引きずらず、夢と現実の区別が明確になされていると言える。

他方、『仮泊にて』では夢に深入りし、環境や外的な刺激に起因する部分もあると作品中ではのめかしながらも、そうした客観的な要素によって夢の謎を解明しようとする近代科学的な言説にも留保をつける、つまりは決定不可能な態度がとられていると言える。夢はただ単に「脳の線維が意識の外で突然震えだすこと *une inconsciente et subite vibration des fibres de l'encéphale*、霊的な活動の残滓、眠っている間に空を噛むかのように、止まることを知らない機械によって濾過をかけられて、思考の萌芽やイメージの蛹を生み出す脳の付加活動なのか？」という神経生理学的な枠組みを繰り出した後に、ジャックは次のように二つの解釈について自問する。

結局は超自然的な原因を認めて、神の摂理がなすことと信じ、支離滅裂な夢想の渦に巻き込まれるべきなのだろうか。男も女も見境なく襲う夢魔を受け入れ、悪魔信仰の遠い記憶のあれこれを迎えるべきなのか？ あるいは、物質的な原因だけにかかずらわり、ただ外部にある原動力、胃の不調や体の不随意運動といったものに、魂が錯乱してこ

36) *Ibid.*

37) 『さかしま』前掲書、p. 135 : *Roman I, op. cit.*, p. 660.

のように表出させたものを関係づけるべきなのか？³⁸⁾

これに続き、悪夢は消化不良からくるとか、寒さに震える夢は毛布をはねのけて裸で寝ていたせいであるとか、高いところから落ちる夢はただ無意識に足を伸ばしたことに起因するという、実験心理学者ヴントの説や³⁹⁾、月の光線が神秘的なヴィジョンを決定づけるという、ドイツの心理学者ポール・ラデストックの説も示しながらも、結局こうしたものは「この自由なプシケーの神秘」を解明に至っていないとしている。夢魔や悪魔憑きなど、以後『彼方』で展開されるようなオカルティズムの影は『仮泊にて』にも忍び寄っていると言えるが⁴⁰⁾、夢を一義的に解釈するのを否定しようというジャック＝ユイスマンスの態度は一貫している。

他方、このような堂々巡りにも見える議論に一步でも前進が見られるとするならば、それは物語の展開から読みとられるものである。ジャックは夢をめぐるここまでの議論について、「学者たちはぶつぶつ言うが *annoncent*……」とし、自らの内省を「役にも立たない *inutiles*」としつつ、太陽が背中を温め、体中に「喜びの流体 *un fluide de joie*」がめぐるのを感じる。その後が続くのは「彼が起き上がって、見た」何色もの視覚表現を用いて行われる風景描写であり、「歩く欲求を感じた」として、通ったことのない道へと、風がゆっくりと流れる音を聞き、土のにおいを嗅ぎながら

38) *Roman I, op. cit.*, p. 808.

39) ユイスマンスにおけるヴントの影響については次を参照。John Damico, “J.-K. Huysmans with Wilhelm Wundt; Ennui, or a Mind-Body Problem”, *Nineteenth Century French Studies*, 51, 1-2, 2022-2023, pp. 136-152.

40) 『彼方』ではヒステリーについて、次のようなデュルタルたちの会話が見られる。「この説明しがたい驚くべき疾病については、すべてが失敗に終わった。したがって、種々雑多な解釈が行われているが、ひとつとして正しいと思われるものがない。なぜならば、この問題には靈魂が介在しているからだ。肉体と争っている靈魂、神経の狂乱のために動転した靈魂があるからだ」「あらゆる説に多少とも根拠があって、しかも確実なものはひとつもないというのじゃあ、ほくは淫夢女精のほうがいいよ。実際、このほうがより文学的で、ほくにはふさわしいからな！」『彼方』(1891) 田辺貞之助訳、創元文庫、1975年、p. 196.

進んでいく姿である。『仮泊にて』における風景描写については、夢や神経症との関連で次章の後半で考察をしよう。

3. 神経症、月世界、自然

第二の夢——月世界の夢——を見る前に、物語上は後に来る、ルイーズの病状が深刻になっていく様子を見ていく。そこにはここまで見てきた夢に関する議論と連動するものと無視しがたい差異が確認できるからである。

第6章は、後述するように夢の中で平安を取り戻したように見えた妻ルイーズの病状が、現実には深刻度を増す場面から始まる。血の気を失い、腕を力なくぶらりとさせていた彼女は、叫び声をあげ出す。作品冒頭で予告されたように「脚に火花放電のようなものが走る奇妙な痛み」が続き、無動力症 *adynamie* に隠れて進行していた子宮筋層炎 *métrite*（当時はヒステリーと混同されたもの）という診断も受ける。

身体という地下納骨所に降りて行き、病に苦しむ女に通例重くのしかかるような、閉塞した感覚 *sensation* の痕跡を見出そうとした後で、医者たちは一人また一人とやってきて、何も見つけられないことに不安を覚えて、次々に戦略を変えた。つまりこの病気の根は至るところに伸びてなおかつどこにも見つけられないのだから、体全体の不調のせいにしたのだ。彼らは強壮剤と刺激剤を処方し、鎮静剤となる臭化カリウムを多量に試した。苦痛を抑え込むために、モルヒネにも頼ったが、ともあれ一つの症状によって、曖昧で全貌が知られることのない苦しみの数々の霧の中に突き進んでいくしかなかったのであり、手をこまねていることはもはやできなかったのである。⁴¹⁾

41) *Roman I, op. cit.*, p. 832.

ここでもまた医学・科学への不信が見られ、とりわけ身体組織の損傷がどこにも見られないという神経症の特徴もふまえて、原因が特定できないまま対症療法を繰り返すしかないと無力感を吐露している点では、夢という現象をめぐる多義性に対するものとはまた別の、より切迫した問いかけを聞き取ることができる。

ジャックは枕に顔を押し付けて体をのたうち回らせているルイズを見ながら、この病いの根源をさかのぼり、こうして今、ルウルに落ち着いた過程をたどり始める。「私たちを狼狽させたこの神経の狂気」は何に由来するのだろうか？ おそらく結婚後、内的な不調から始まったことが体だけでなく心にも侵入してきたのではないかと自問しながら、「結局は、魂の麻痺 *torpeurs de l'âme* に対しては子宮筋層炎の重しがかかり、意気阻喪した意志の無気力 *langueurs d'une volonté déchuée* に対しては、臓腑の一つを荒廃させて消失させた」⁴²⁾ と整理している。ここには精神と身体に対応関係が見られるのであり、現実と夢、自然主義と象徴主義の混成物として評される『仮泊にて』にとどまらず、『彼方』など心靈主義やカトリシズムとの関連が問われる 90 年代以降の作品でもたえず論じられる点である⁴³⁾。

＊

42) *Ibid.*, p. 833. ロベール・ラフォン版のユイスマンス小説集の注では、ここで述べられる「意志」については、テオデュール・リボー『意志の疾患』(1883)へのほめかしではないかと示唆されている。フランスへのショーペンハウアー移入で注目されてきたリボーについては、その心理学の意義、そして世紀末文学者に及ぼした影響も含めて重要である。そうした研究の一つとして次を参照。谷田陽祐「レミ・ド・グールモンの『シクスティース』再読——心理学の疾病研究の活用法を手がかりに」『Nord-Est (日本フランス語フランス文学会東北支部会報)』第 13 号、2020 年、pp. 14-31.

43) 一方、神経症表象からは外れるが、ジャックがこの後に考えを巡らせるのは、ルイズとの家庭生活の意義であり、病に苦しみながらも食事の支度をするルイズの描写を差しはさみながら、『家庭にて *En ménage*』にも通じる妻帯と独身をめぐる考察が繰り上げられる。理想の「仮泊 *rade*」としての家庭のモデルも描き出され、ジャックの内なる声を通して、ユイスマンス作品の女性観をうかがうことができる。『家庭にて』などユイスマンス作品に見られる女性嫌悪の問題に関しては、ミシェル・ウエルベックとの関連から論じたことがある。拙論、「ミシェル・ウエルベックとユイスマンス——『服従』における《女性嫌悪》をめぐる——」『人文研究』第 196 号、2018 年、pp. 3-37.

一方、このように現実には袋小路に陥っている状況下にあってジャックが見た、月世界旅行の夢を見てみよう（第5章）。確かに月に関しては、前章の第4章末で、ジャック夫妻が二人で夜空を見上げ、「深淵の奥底にまで下りて行くかのように口を開ける井戸にも似た」満月が城館の後ろに見える場面が用意されており、物語上の連関をたどることは可能かもしれない⁴⁴⁾。しかし、地上から見上げてみる月と、月面をさすらうヴィジョンは大きく異なるはずであり、そもそも月世界は人間的・歴史的な意味を欠いた空間である。「嵐の海」などという地名がつけられていたとしても、現実には「海」とは名ばかりの水のない、月面のへこんだ空間であり、きわめて抽象的な空間なのである⁴⁵⁾。なぜユイスマンスはここで月世界という、きわめて非文学的なトポスを夢の舞台として選んだのだろうか。

エステルの夢とは異なり、夢への移行の場面がないまま、章の冒頭から読者にとってはまったく未知なる情景が記述されていく。

それはあらゆる限界を超えた場所、まなざしがどこまでも遠くに向けられるが消失していく果てにある、乾いた石膏の広大無辺の砂漠、固まった石灰乳でできたサハラであった。その中心には円形をした巨大な山がそびえ、スポンジのように穴が所々に空いた、でこぼこをした山腹を見せていた。⁴⁶⁾

月という文字通り人間を寄せ付けない光景が、唯物論的記述（規模、材質、

44) 高みにある月を地下の井戸に喩えるこの意外の比喩は、ジャックが水を汲み上げるのに難儀する城館の井戸を喚起すると同時に、ルイズの心身の空虚さ、さらにはそこからメッセージ（水）を引き出すことのできないジャックの無力さを示唆するものとも言える。

45) 次も参照。「彼は次のように考えて笑みを浮かべた。どうあれ月というのはかなり奇妙な場所だ、空気も植物も大地も水もなく、あるのは岩や溶岩の流れ、地層の重なったクレーターや死火山しかないのだ。なぜ天文学はあの不正確な名前を手放さないでいたのだろう、かつての学者が数々の平原や山などに与えた、時代がかった奇妙な名を？」*Roman I, op. cit.*, p. 826.

46) *Ibid.*, p. 825.

形状……)によって「観測」されている。

これに関して、湯沢英彦が鋭く指摘しているように、ユイスマンスによる月世界の描写は空虚さに特徴づけられるものであり、空洞という形態や色の不在の強調によって「絶望的な不毛性や死や不在の観念」をも示唆するものとなる⁴⁷⁾。また、夫婦は夢の中で地図を片手に月世界旅行をするのだが、「腐敗の海」ではその名に矛盾するかのようになり、ルイーズは「何の匂いもしない」とジャックに語る。「空虚、無、においの欠如と音の欠如、嗅覚も聴覚も抹消されている」という記述もとりあげて、湯沢は「身体空洞化」という主題を導いている⁴⁸⁾。これはまたガストン・バシュラルが『大地と休息の夢想』でこの月の夢を取りあげて、「不動化したカオス、石化したカオス」と称したことにも通じるだろうし⁴⁹⁾、21世紀の作品となるが、ミシェル・ウエルベックの『ある島の可能性』(2005)の最後に繰り返される地の果てとも言えるべき荒れ果てた大地で示される、ポストヒューマン的風景につながるものなのかもしれない。

しかし、このような感覚を欠いた世界、人間的な意味付けがなされない、重力のない場であり、抽象化された「地図」のような世界を描くことの意味は何だろうか？ たしかに月に地名をつけたり、文中にも出てくるように、月の女神セレーヌなどの神話や抽象的観念を貼り付けたりすることはできるだろうが⁵⁰⁾、ユイスマンスが実験していることは、文学がこれまで表現してきたものを問いただし、その限界を拡張させる行為とも言える。

ここでは神経の観点から、月という前人未到の風景について分析してみよう。

47) 湯沢、前掲書、p. 121.

48) 同書、p. 123.

49) Gaston Bachelard, *La Terre et les rêveries du repos*, José Corti, 1948, p. 59.

50) フロイトの夢解釈を予知するかのように、ユイスマンス自身が性的な解釈を与えてそれを殊更に露呈させている部分がある。「(肥沃の海と甘露の海によって内反足の二本の脚のように分かれてできた) V 字形の湾によって少女のように性的にされたアレクシア岬」*Roman I, op. cit.*, p. 829.

ジャックは思いをめぐらせていた。どんな天変地異の後に、あの暴風雨は凝固し、あの噴火口は消失したのだろうか？ どのような卵巢の、あの見事な圧迫によって、あの聖なる苦しみ、この世界のてんかん *épilepsie* は押しとどめられたのだろうか？ 火を吐き、竜巻を次々に吹き上げ、溶岩の層の上で身を震わせていきりたつ惑星のヒステリーを？ どのような無謬の祓魔をもってすれば、冷血な月の女神セレーヌは身体硬直 *catalepsie* に陥って、あの破られることのない沈黙、理解不可能の天の不変の闇のもとで永遠に漂い続ける沈黙に至るのか？⁵¹⁾

この引用の前半については湯沢も分析しており、同時代のシャルコーを代表とするヒステリー言説を引きながら、月の荒涼とした光景を「てんかん」「ヒステリー」に連想させている。そしてその背景には、妻ルイーズの発作の姿があることを指摘し、「コントロールの効かなくなった身体」という主題を見出している点についても異論のないところである。

他方、てんかんやヒステリーを鎮める可能性についての熟考はまだ終わっていない。「てんかん *épilepsie*」の後には、「身体硬直 *catalepsie*」が続くのである（*épi-* が「上に」重なるのを示すのに対して、*cata-* は「反して」等の意味がある）。すでに示したように、『仮泊にて』冒頭から、ルイーズの病状は太ったかとも思えば痩せはじめたり、叫び声をあげるときもあれば衰弱に陥るといふ、動と静によって特徴づけられていることが予告されていた。このような月＝狂気の二面性もまた注目すべきところであり、またセレーヌという月の女神の形象を通じて、女性というジェンダーにあてがわれる点も見逃してはならないだろう⁵²⁾。月という音のない世界、

51) *Ibid.*, p. 830.

52) 〈月＝女〉の動と静の両義性については次も参照。Pierre Glaudes, « L'imaginaire conjugal dans *En rade* de J.-K. Huysmans », *Revue d'Histoire littéraire de la France*, vol. 93, no 1, 1993, p. 112.

動かない、石化した世界は、回復したルイーズの心身よりはむしろ、神経症に苦しむルイーズのもう一つの姿として表出されたものであると言える⁵³⁾。

これに続く箇所では月は女巨人タイタンにたとえられ、「理性をおびえさせ、人間の弱さを恐怖で震え上がらせる」とし、「空虚が長々ともたらす恐怖」にジャックは下腹部を痛める。しかし、ルイーズを見てみると落ち着きを保っており、彼の心身にもまた平穏が訪れるのである。

この安らぎ、自身の近くに、言うなれば明白に存在し生きている者がいて触れられるというはっきりとした実感が、彼の数々の不安を和らげた。眼玉を引っ張り出して深淵の底にゆっくりと引きずり込むかのようなあの眩暈は今や雲散霧消して、彼の視線は目の前にいる既知の生き物に、良識をもち確固とした存在に注がれたのである⁵⁴⁾。

この魂の静寂は感覚過剰の狂騒の状態を脱して、ある種の無感覚——身体硬直、麻痺——へと至る道とまずはとらえられるかもしれない。一方で、このジャックの感情が妻の落ち着き、そして彼女の存在の確実性に起因するという点も見逃せない。視覚以外の感覚を失った月という世界でも、「触れられるというはっきりとした実感」が平穏をもたらすのである（月でルイーズはジャックの腕をとって歩いている）。夢の中であれ、あるいは夢の中であるからこそ、理性を混乱させる〈月＝女〉は同時に、理性を回復し感覚のエコノミーを安定させる存在でもあるのである。

53) 強硬症などとも訳されるカタレプシーは、ユイスマンズに近いところではゾラの短編『オリヴィエ・ベカイユの死』(1879)でも物語を動かす重要な要素とされており、『仮泊にて』との舞台の類似性という観点で見れば、エドガー・ポオの『アッシャー家の崩壊』(1839)においても登場している。

54) *Roman I, op. cit.*, pp. 830-831.

たしかにこの後、ジャックは「岩の心臓」「鉱物の肺」など身体の実質を欠いた月の山のように、「自分の衣服の下は空っぽである」と感じ、空洞化された身体の想念が再び語られるが、そこにはペシミスティックな調子は感じられず、むしろ地球の重力から解き放たれて、「身軽で、ほとんど流体と言って良く *Il se sentait léger, presque fluide*、どこかへ飛んでいきそう」⁵⁵⁾ という感覚は、病と健康、現実と夢という二項対立を超えて、風に吹きつけられた主体が流れのままに漂うことも肯定する観点を示しているのではないだろうか。

＊

そして、夢の描写を超えて、現実の風景の描写にも月の世界の描写に通じるような、感覚を麻痺させたような表現が見られるのである。『仮泊にて』は夢の挿入で特徴づけられる作品とされてきたが、その大部分は地方情景の描写で占められており、ジャックは城館を中心とした散策に散策を重ねている⁵⁶⁾。それは一方では、荒れ果てた城館、埃と簞えた匂いに代表されるような、情感に乏しい光景であるが、ゴンクールを代表とする芸術家的文体を駆使した自然描写は、本論文の主題を離れても印象的なものである。そのなかで、世界に対する関心というものとは無縁の、いわば非人間的な描写の実例を見てみよう。

ある日曜日、彼は教会には行かないという義理のおじアントワヌと言葉を交わした後（「ミサは司祭の仕事でないかい？」）、ジャックはここジュティニーに最初に来たときには霧に包まれていた風景を改めて眺める（第7章）。空と地平線、流れる雲と風にそよぐポプラなどが、色彩や形状の表現を多用しながら描写されていくが、次のような意想外の視点が示されることになる。

55) *Ibid.*, p. 831.

56) 大野英士は、ジャックによる城館の内部やその近辺をめぐる散策・徘徊は、およそ20回を数えると推計している。大野、前掲書、p. 161.

ジャックは8月の空の青い残酷さに茫然とし、11月の灰色の悲しみに心奪われながらも、このような季節の取引のようなものに無関心 indifférent なままであった。季節は順々に、あるときは気づかわしげに、あるときは陽気に巡りきても、現実にあるメランコリーや本物の喜びをもたらしてはくれないのだ。彼は城館に帰り、中庭を散歩した。芝生の上に座ったが、この体勢は彼を落ち着かせなかった。彼は腹ばいになり、何も考えず、花を摘み集めるのを喜んだ。⁵⁷⁾

ジャックは季節の推移に対する無感覚を打ち明け、また庭に咲く花々に対してただひたすら、というよりも特別な感情もなく摘み取っていく。実際、この中庭の芝生に生えている花々は道端に生えている花々の花粉が飛んできて自生しているような、さもない花々であったが、彼の姿は、特別なものに彩られていない、季節感に縛られたお決まりの感情から遠く離れたところにあると言えよう。どこにでもある単調な風景を呆然と（「何も考えず」）見つめることこそが、ジャックのルウルでの日課となっているのである。

この世界に対するアパシーすなわち無感動の状態は、神経表象において見てきた心の「麻痺 engourdissement」という言葉で表される態度となる。夜、城館では鳥たちが争う声が聞こえ、廊下を吹き抜ける風は館の所々に入っているひびをハーモニカのようにして唸り声をあげるが、ジャックはもはやそれを感じることはない。ときどきフクロウの叫びに起こされることはあったが、

しかし、これは心を逆なでし不安にするような感覚に他ならなかったとしても、実体のある恐れ、本当の恐怖を呼び起こすものではなかつ

57) *Roman I, op. cit.*, p. 847.

た。けっきょく彼は、脅威は自分には現れないと考えて、こうした危険には感情を動かされず *indifférent*、再び眠りに落ちた。

そしてまた別のことが起こった。この野山が彼に流し込んだまどろみ *assoupissement* は、ルウルに到着した日から際立って増えた、あの夢を見る生活を麻痺させた *engourdi* のであった。今や彼は何の障害もなく眠っていた。あちらこちらで、彼は夢の境界線上をなおもさまよっているように感じることはあったが、かつてパリにいた時と同じように、目を覚ましたとき、幻覚の領域をさすらっていた記憶をいかなる形でも保つことはなかったのである。あるいは、覚えていたとしてもそれは意味を欠いた、どこかに侵入した際の残骸にすぎないのである。

この場面の前段としては、ツツガムシの突然の襲撃に遭い、ジャックは痺みに耐え、同じ寝床でルイズは病に苦しんで叫び声を漏らさないようにこらえているという悲喜劇的な状況が展開していた。一方、旅や新しい生活に慣れるために疲労している場合には、城館にまつわるものに対して感じる本能的な嫌悪感はなくなるという文脈からの引用となる。この意味ではジャックにとってこうした認識は、例外的な事例とされるべきことかもしれない。

一方で、「まどろみ」や「麻痺」という言葉を用いて、夢を見ることそのものがなくなる事態がここで語られている。『仮泊にて』は作品それ自体が現実と夢の境界線上をさまようような構成をたどるが、ここまで見てきたようにエステルの夢であれ月世界の夢であれ、鮮明なイメージを残していたことは明らかである。しかしここで語られているように、それも残骸としてしか記憶にとどまっていなかったらば、最初の段落の挿話にあるように、フクロウなど自分にとって無意味なものになったこと、心理学でい

う「états indifférents 無感動状態」であることを意味するのではないか。そしてこうした事態は夢にとどまらず、神経症に対する一態度、さらには神経症の一つの徴候——ゆるやかなカタレプシー的なもの——と考えられる。

実はこの作品の冒頭から、このような心の「麻痺状態 engourdissement」は予告されていたとみなすこともできる。債権者から逃れパリを脱出した夫婦にとって、ジュティニーという土地は、経済的苦境という荒海を一時的にも退避する「停泊地」であると同時に、ルイーズの転地療法という観点から見ても期待がかけられて良い場所であった。ジャックは城館へ辿りつく前に教会が眼前に迫ってくるのを見るが、納屋のような建物は陰気な感じを与える。彼が出くわした新しい環境は、彼に力を与えるどころか、意気消沈させるものとなったのである。

身をしおれさせるような悲しみ Une alanguissante tristesse が彼を打ちひしいた。それを、ここまでの道中で彼を「刺した」悲しみとはまた別様の悲しみである。その苦悶にあった人格は消えてしまった。大きく広がり、溶解し、固有の性質を喪失した悲しみは、いわば彼自身から逃れて、あのいわく言い難い憂鬱、夕べの重くのしかかる休息のもとにうずくまる風景が発散するメランコリーと結合したのだった。この漠として沈み込んだ悲嘆 cette détresse vague et noyée は、深く考えようとする行為を排除し、魂をまさにその狂騒 transes から清め、痛点を和らげ、その神秘によって苦悩そのものの確かさを矯正し、穏やかにするのであった。⁵⁸⁾

ここで言う「身をしおれさせるような悲しみ」「漠として沈み込んだ悲嘆」

58) *Ibid.*, pp. 783-784.

とは何だろうか。まずそれは個人の感情に存するような人格を持った悲しみなのではなく、非個人的な広がりを持つ漠たる悲しみであり、第二に、環境によって導きだされるものである（「風景が発散するメランコリー」）。そして最後に、「刺す」悲しみなのではなく、むしろ痛点を眠り込ませ endormant、悲しみの内にある神秘によって大いなる苦悩を肯定して、苦悩を和らげようとするものなのである⁵⁹⁾。

畢竟、ジャックそしてユイスマンス自身が最初に期待したような形では、田舎暮らしは神経の病に対して治癒的な効果は果たさなかったように思われる。しかし、世界に対する「観照 contemplation」とも言ってよいような視線を与えることによって、個人の悲しみは世界の悲しみに広がり、むしろ苦悩があることそのものを肯定することで、苦悩を穏やかにする効果はあったのかもしれない。このようなショーペンハウアー的な態度は⁶⁰⁾、フランス世紀末に支配的となった「私の表象が世界の表象である」という独我論的な世界観を再編する可能性を持っており、ユイスマンスがショーペンハウアーに何を見たかについても再検討する必要があるだろう。

そして作品最後半の第10章、本稿では分析できなかったが「真理という名の娼婦」というべき、これまでに増して奇妙な夢が前章で展開された後、悪夢を繰り返し見るようになったジャックは、ジュティニーに滞在していたにもかかわらずまだ訪れることのなかった教会の墓地を見つける

59) 『黒いユーモア選集』における、ユイスマンスの『家庭にて』についての評言もこれに近い認識を伝えている。「自分を慰め、同時に苦渋をいっそう苦いものにしてくれるような本、自分の倦怠と同じ性質の最大の倦怠を語っているような本、自分と比べることによって自分を安堵させてくれるような本」アンドレ・ブルトン編著『黒いユーモア選集』上巻、山中散生他編、国文社、1968年、p. 227。

60) 例えば、以下を参照。「見渡す限りの地平線、空には雲ひとつなく、そよとも風が吹かぬなか、草木もなびかず、獣も人もおらず、流れる水もない、ただ深い静寂が支配する荒涼とした土地にいて考えてみよう。このような環境は、私たちにあらゆる意欲とその凡庸さを離れ、ひたすら厳肅な気持ちで観照するよう呼びかけているように思われるだろう。だが、荒涼で平穏なこの風景に崇高な味わいを与えるのは、すべての意欲とその凡庸さを断ち切った観照の態度なのだ。」ショーペンハウアー『意志と表象としての世界II』（第3巻、第39節）西尾幹二訳、中公クラシックス、2004年、p. 82。

のである。

ジャックはこのような一角、かくも穏やかでかくも安逸な場所をもつと早く知っておけばよかったと後悔した。自分にとってここだけが、わが身から生まれるさまざまな狂騒 *transes* と平和裡につき合って行ける場所で、眠らずにいる悲しい考えを揺りかごに入れて揺らしてくれる場所なのだ。あらゆるものから離れて、隠れて、孤独でいられる場所 *On était si loin de tout, si caché, si seul!*⁶¹⁾

実際には楽園——ゾラ『ムーレ神父のあやまち』(1875)のパラドゥーのような感覚^{サシス}=意味の充溢の空間⁶²⁾——とはまったく言い難い風景が広がるこの教会の墓地こそ、ジャックが最後に見つけた秘密の花園であり、現実の刺激にも悪夢にも悩まされずに、眠りにつける場となったのである。

結論に代えて

以上、ユイスマンス『仮泊にて』を神経文学の一つとして読解してきた。それはまずは、主人公の妻ルイズの神経の病がどのように表象されているかを探ることであったが、神経表象という観点からはそれにとどまるものではなかった。この作品の特徴をなす夢の挿入もまた、神経症と連動して読み解くべきものであり、それはモーリーの『睡眠と夢』という補助線(第1章)や、夢そして神経症を説明するものの決定不可能性(第2章)という点から示されたように思う。重篤の度合いは違えどアンナ・ムニエのみならずユイスマンスも神経症に苦しんだように、ルイズだけでなく

61) *Roman I, op. cit.*, p. 885.

62) 「バラの森が開花するのも、花壇が甘くけだるい香りを放つのも、すべて彼らのためだった」『ムーレ神父のあやまち』清水正和、倉智恒夫訳・解説、藤原書店、2003年、p. 267.

ジャックもまた、奇怪な夢を立て続けに見た点では、神経の疾患を被った形象なのである。そして、物語の中でそれは夢の表象にのみ判じ絵のように浮かびあがるのではなく、現実の、ルウルの城館や近くの混沌とした自然にも見出されるものであった（第3章）。夢で見た月の世界は感覚を欠いた空間であったが、夫妻はこの月世界旅行の果てにある種の平安にたどりつく。それは夢における願望充足——夫婦愛——があったからというだけでなく、現実の自然描写でも同形の認識に至るのであり、それを示す表現として、「身体硬直 catalepsie」、「麻痺状態 engourdissement」、「無関心 indifférent」、そして「観照 contemplation」が挙げられるだろう。本論では取り上げられなかったが、最終章でルイズは愛猫の「断末魔を悲しく見つめる contempler」⁶³⁾のである。『さかしまに』の「感覚過敏 hyperesthésie」から、『仮泊にて』の「精神の麻痺 engourdissement」へ——、ユイスマンスの力点はその位置をずらしていったと言える⁶⁴⁾。

本論では、『仮泊にて』における自然描写の意味について最後に考察することができたが、その嫌悪感すら覚えさせるような、庭園という人工天国を食い破るように繁茂する野生の植物の表象については十分に分析することができなかった。また夢の場面に限らず現実描写でも通奏低音になっている「黒いユーモア」、そして第三の夢にして最も奇怪な夢とも言うべき、「真理という名の娼婦」の夢については扱うことができなかった⁶⁵⁾。介護小説としての問題や夫婦関係に見る登場人物のジェンダー認識というのも重要な課題であろう。またこれまで『仮泊にて』については、象徵主義ともイデアリズムとも解されるような夢の側面を重視するあまり、現実

63) *Ibid.*, p. 896.

64) ジャン＝ルイ・カバネスは同時代のレアリスム文学における神経症の描写の特徴として、こうした動的・静的な面が共に見られることを指摘している。Jean-Louis Cabanès, *Le Corps et la maladie dans les récits réalistes (1856-1893)*, Klincksieck Ho, 1990. <https://lire.amazon.fr/kp/kshare?asin=B01DY4IYV0&id=6sh3och5crhs7pefry5odl6elm>

65) 湯沢英彦の論ではこの三点も明確な分析の対象となっている。湯沢、前掲書、pp. 107-137.

描写について、ゾラやモーパッサンなど自然主義的な作品との比較も十分ではなかったように思われる。今後の検討課題とするとともに、現実／夢、身体／精神、小説／詩、自然主義／象徴主義、リアリズム／イデアリズムとして研究領域としてもいまだに分断されがちなフランス世紀末にあって、それを「神経」によって架橋するような『仮泊にて』、そしてユイスマンスという存在の特異性を指摘して、筆をおきたい⁶⁶⁾。

66) 本稿は、日本学術振興会科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）「心の終焉—神経表象と19世紀末フランス」による研究成果の一部である。

『さかしまに』において神経を刺激するもの（引用は『さかしま』（澁澤龍彦訳、前掲書）から行い、引用後の数字はページ数を指す。）

	神経を刺激するもの	具体的な挿話	関連する引用
第1章	室内装飾と料理	オレンジ色と青の色調	衰弱した神経質な性格のひとびと、異常に敏感で倫理的な性格のひとびとは、ほとんどすべて、人工的な華麗さと辛辣な熱っぽさを具えた、あのいら立たしい病的な色彩、すなわち、オレンジ色を愛好するのである。27
第2章	人工天国	水族館のような食堂、外に見える「人工的な」風景	幻覚を生ぜしめ、現実そのものに現実の夢を代置し得るまでに、一事に没頭する36 / 自然はもう廃れている36
第3章	ローマ帝国後期ラテン文学（「デカダンス」）	ベトロニウス、アプレイウス	デ・ゼッサントのラテン語に寄せる関心は、[……] ラテン語が完全に腐り切って、その手腕を失い、その膿を滴らし、その肉体全体に腐敗がひろがって、ただ幾つかの部分のみ堅固な外観をとどめているにすぎなくなった時期にまで、弱まることなく続くのであった。55
第4章	宝石、リキュール＝音楽	宝石を象嵌した亀、口中オルガン	それぞれの酒の味覚は彼にとって、楽器の音に対応していた。68
第5章	絵画	モローの《サロメ》2作品、ルドンなどの版画	（サロメは）ただ神経症により幻覚を生ずるようになったひと、衰弱した、研ぎ澄まされた頭脳のひとにのみ、よく捕捉され得るのである。79
第6章	ラテン語の詩篇『美しい貞潔について』	二人の男の貞潔を逆なでしようとした想い出	「貧乏人の蒙をひらき、彼らの神経組織を洗練させてやればやるほど、いよいよ彼らの内部には、なまなましい精神的苦痛と憎悪との芽生えが強靱に育って行くにちがいない」106

第7章	神学校で受けた宗教教育、神学の想起	瀆聖、原罪、ショーペンハウアー	人工的なものへの好みも、風変わりなものへの欲求も、[……] 美しい外観を持った学問、この世のものならぬ洗練、純神学的な思弁の結果ではなかったろうか。115
第8章	植物	温室に育つ熱帯の花々、食肉植物、梅毒のイメージと化した女の悪夢	人間の作ったものを真似ることができない時は、自然はせめて動物の体内の膜を模倣したり、動物の腐った皮膚から生まましい色や、動物の壊疽から豪華な醜悪さを借り受けたりすることで満足しているらしかった。132
第9章	娼婦	ゴヤの幻想画、鎮静作用を期待したディケンズ、ミス・ウラニアと「性の交換」の幻想	頭のなかの想念を一新するために、鎮静剤になる本などを読み、脳髄を冷却するために、麻酔剤になる芸術の薬草など服用してみようと思った。143 / 脳の沸騰も、すでに肉体の凍結を溶かすにいたらなかった。神経はもはや意志に従わなかった。154
第10章	香水	調香による理想の空間の設計、パンタンの香水工場の想起	[赤素馨の匂いは] 彼の酷使された鼻孔をくすぐり、疲れ切った神経をふたたび揺すぶって、甚だしい虚脱の状態に彼をおとし入れたので、彼はほとんど失神せんばかりになって、窓の凭れの植木に手をかけたまま、ふらふらと倒れかかった。174
第11章	「ロンドン」への旅行	パリにあるイギリス書店や酒場、レストランを馬車でめぐる。ハドックと黒ビール	椅子に坐ったまま、こんなにすばらしい旅行ができるというのに、どうしてわざわざロンドンまで足を運ぶ必要があろう。193
第12章	書物（フランス文学）	書物の装幀美、ボードレール、カトリック文学、エロオ『人間』、バルベー・ドールヴィー、	熟れすぎて腐る一歩手前の、こんな不健康な魅力こそ、彼が古代のラテン文学や修道院文学の類唐派作家のうちに、こよなく愛した味わいでもあった。225

第 13 章	修道院で作られた酒	子どもたちにとって重荷でしかない未来、生殖と愛欲をめぐる議論	テーブルの上のコップさえ一里も離れた場所にあるように見え出した。これはもう、明らかに彼が感覚器官の幻覚の玩弄物になってしまった証拠であり、自分の力ではどうすることもできないかのようであった。227
第 14 章	現代文学	圧力鍋料理、フローベール、ゴンクール、ゾラ、ヴェルレーヌ、ポオ、ヴィリエ・ド・リラダン、マラルメ、バルトラン	この上もなく鋭い感受性の高揚、この上もなく病的な心理学の気まぐれ、また、感覚と観念の沸騰せんばかり辛辣な味を抑えたり隠したりすることを絶対に拒否する、言葉のこの上もなく極端な頹廃 253 / ポオの創造した人物たちは、遺伝的な神経症にその身を引きつけ、精神の舞蹈病に狂わんばかりになって、ただ神経のみによって生きるのである。 263
第 15 章	音楽	グレゴリオ聖歌、オルガン曲、室内楽の演奏会の回想、養灌腸のレシピ	これらの憔悴した音楽〔中世の修道院音楽〕は、ある種の古いラテン語のキリスト教文学のように、彼の神経に否応なくはたらきかけた。281 / [ベートーヴェン、シューマン、シューベルトは] エドガア・ポオの最も身に迫る、最も不安な詩のように、彼の神経をすり減らすのであった。283 / こんな風にして栄養を摂取するということは、どう考えても、人間が実行し得る変則的生活の極致であるにちがいがなかった。288
第 16 章	(パリへの強制帰還)	教会や貴族の中に侵入している金と人工物、偶像崇拜の現代社会	彼にはいかなる停泊地も残されていないければ、いかなる波止場も残されていないのだった。家族も友達もいないパリで、自分は今後どうなるのであろう。301 / 「さあ、これですべてが終わったのだ。人間世界の凡俗の波は高潮のように天にまで押し、おれの隠遁所をも呑みこもうとする。」304

Revision history and emergence of “the style that differentiates the authors’ narrative and the characters’ speech”—A focus on the revisions of Xia Shang’s novel “Chronicles of the Shanghai Pudong”

JIA Haitao

Abstract

In this paper, taking XIA Shang’s 夏商 novel “Chronicles of the Shanghai Pudong” 『東岸紀事』 (2011) as a case study, we first reviewed the revision history of various editions and then meticulously organized the actual modifications of Shanghainese within the work by comparatively analyzing multiple published versions. This approach allowed us to identify how dialect vocabulary and its stylistic features were incorporated.

To clarify the characteristics of dialect usage in the work and the author’s narrative awareness, we introduced an analytical method called “version criticism” 版本批評. This approach traces the signs of exploration in literary languages through the revisions of specific editions, helping us to understand the realities of these modifications.

This method was advocated by literary researcher JIN Hongyu 金宏宇. While classical philology involves the empirical analysis of text versions—examining forms, materials, genesis, and identification of reliable editions—“version criticism” in modern literature aims primarily to verify the changes in the different versions of a work, organize the variations in wording due to the author’s revisions, and analyze the reasons behind these changes and their features, as well as the underlying social, political, and ideological demands. The introduction of “version criticism” has proven highly effective in examining the dialect usage and language consciousness of authors from Shanghai.

In this paper, we found that the modifications of literary language in “Chronicles of the Shanghai Pudong” primarily focus on replacing stan-

standardized expressions with dialect vocabulary in dialogue texts where words carry meanings independently, referred to as “actual words” 実詞. On the other hand, although there are fewer modifications to dialect vocabulary in narrative texts, limited vocabulary such as terms for addressing relatives, swear words, and idioms are retained. These modifications and retained elements are positioned both inside and outside the quotation marks, highlighting the stylistic differences between the narrative and dialogue texts as the versions evolve. In other words, the modifications and use of dialect are based almost exclusively on “the style that differentiates the authors’ narrative and the characters’ speech” 「叙言分離体」.